

全国縦断シンポジウム東京集会

東京集会の成功を通じて私たちがつかんだもの

田中 羊子 (日本労働者協同組合連合会センター事業団東京事業本部)

1. 第7次1.2.3.運動の中での  
雇用シンポ東京集会の位置づけ

労働者協同組合センター事業団東京事業本部は、この4年間の改革の中で、かつてない全組合員経営の内実の高まりの中で、第7次1.2.3.運動を迎えた。良い仕事の改革や、原価率を現場の組合員の手で出す取り組み、高齢者協同組合への意欲の高まりなど。ここから生まれている組合員の前向きな意欲を、外への迫力ある行動に結んで、事業・運動での東京地区の大飛躍を、今年こそ手にする第7次1.2.3.運動にしたいというのがテーマだった。

何のために労働者協同組合で働くのか——。このことが、今の労働者協同組合をとりまく時代の状況と、一步一步の全組合員経営の高まりの中で、組合員の確かな実感になりつつある。東京事業本部では、時代の要請に応える労働者協同組合らしい事業・運動に挑戦するテーマとして、次の三つを掲げた。

- ①安全な医療環境づくりを支える病院関連事業の拡大
- ②高齢者の仕事づくりと高齢者協同組合の実際の事業・運動の開始
- ③東京の雇用シンポを大きく成功させる

とりわけ、雇用シンポの取り組みは、三度の自治体集中行動や、「病院で死ぬということ」上映運動、高齢者協同組合づくりで知り合った人たちともう一度深く結び合い、まだまだ出会っていない東京の圧倒的多くの人たちに、労働者協同組合の存在を知らせる運動として高く位置づけた。

東京でも、リストラの嵐がふきあれ、大量失業、中小自営業者の倒産、学生の就職難など、深刻な状況が進行している。が、その一方で、企業の中

での今までの働き方を問い直し、人間らしい働き方や、新しい価値観を求める労働者の模索や、地域の人たちの必要と結んで、自分たちの事業の活路を見出す仕事おこしのたくましい試みが広がっている。

人間のかけがえのない能力、可能性を労働を通じて発揮する権利を、企業に全てゆだねてしまうのではなく、労働者が労働者のままで協同して実現する新しい道を、労働者協同組合は身をもって社会に示そうとしている。そのことへの共感が、圧倒的多くの人たちの間に広がる時代に入っていることに確信を持って、次の三つの方針で行動を開始した。

- ①仕事の拡大、高齢者協同組合づくりを一つのものとして取り組み、雇用シンポへの参加を圧倒的多数の人に呼びかけよう
- ②地域の再生に取り組むあらゆる人のところに、臆することなく足を運び結び合おう
- ③とりわけ、自治体労働組合との結びつきを雇用シンポを契機に強める

2. 集会当日までの取り組み

取り組みに当たっては、この4年間で結びついたすべての自治体の方々をリストアップした。これを地域別に分担し、センター事業団東京事業本部及び各事業所、労協全国連合会、協同総研のメンバーでチームをつくり、2月中旬から集中的に訪問した。

都職労を初めとする労働組合、東京土建一般労働組合・民主商工会など地域に基盤をもった団体、非営利企業、市民団体、生活協同組合、医療機関、福祉団体、農業団体、研究者など——。また、新聞に掲載された記事を見て、大田区職労や、シーズ（市民活動を支える制度をつくる会）や未

来バンク、オルター・トレードジャパンなどの非営利団体を訪ね、その新しい試みに刺激を受けた。全体で170の団体・個人を訪問し、そこから100人を越える外部の方々が参加。私たちの行動の範囲を圧倒的に広げ、東京で多様なところに広く労働者協同組合の存在を知らせることができた。

### 3. 東京集会の成功を通じて

#### つかんだ確信

①空洞化する地域経済、労働者・住民の側からの復興、営利目的ではない人間本位の社会経済システムの構築、地域の切実な必要と、生産者・労働者の必要を結んだ仕事おこし、そしてそのための広範なネットワークの形成——。

同じような思いで、人間が本当に大切にされる「非営利・協同」の新しい時代を、主体的に切り拓こうとしているたくさんの勢力が、東京のあちこちに存在し、がんばっていることがよくわかった。

かけ値なしにそのことを思い、自立的・主体的に実践している人が出会い、自由に語り合い、新しい結びつきを広げた集会だったように思う。

②労働組合と労働者協同組合の接点・新しい関係に展望が見えた。

この東京集会は、東京地評（東京地方労働組合評議会）との共催で成功したのが、とても大きな成果だった。また、不況打開や協同の取り組みに関心を寄せる様々な労働組合の人たちが、立場を問わず参加し、交流を深めることができた。

組織の中の組合員の利益だけでなく、不況に苦しむ中小自営業者や障害者など、地域住民全体の利益にたつて闘う中で、自らの視野を広げ、労働者としての成長を遂げている労働組合が存在することに励まされた。また、そこと労働者協同組合の取り組みが共感し合い、協力して取り組めることの接点が多いことに確信をもつことができた。

労働組合との関係では、逆風を受けることも多いだけに、首都東京で、東京地評や都職労他の労

働組合と共に、地域から協力・協同の実践、事実を一つ一つつくり出していくことが、非常に重い意味を持つと思う。

③雇用シンポ以降、自治体労働組合との関係の深まりがもたらしているもの。

都立老人医療センターの医事当直業務が、異例の随意契約で委託が決まり、4月1日から業務がスタートした。今まで嘱託だった医事当直業務を、東京都の指示で今年度委託することになったが、そこで働く労働者が都区一般（都区関連一般労働組合）に加入して、はどめのない委託化に反対。労働問題化し、委託先を事業団に指名することで、条件つきで合意した。都区一般労組が、労働者協同組合の趣旨や経営について非常に理解を示して下さり、委託額の引き上げや、委託後、労働者が気持ちを切り変えて主体者となって関われるよう、一緒に話し合いをして下さっている。

今後、ますます進む自治体のリストラ・合理化の波の中で、対住民サービス部門の委託のあり方にはどめをかけ、基準をもって労働者協同組合がその受け皿となり、労働者と仕事の質を守っていく道が拓けた意味は大きい。この点での、自治体労働組合との協力・協同の関係をいっそう大きく発展させたい。

④雇用シンポへ向けた行動を通じて、私たち自身が労働者協同組合に取り組む意味や、新しい社会をつくろうとする勢力の結び目としての位置、そして、そこへの多くの期待や共感を実感でき、いっそう主体的な役割を果たすことへの自覚を高めることができた。

また、そうした働き方を、今の転換の時代の中で、かけ値なしにやりぬける労働者協同組合の一員であることに改めて、誇りや喜びを感じられた取り組みだった。